ユニバーシアード

JOAの事務局長でもあり、強化委員会のJWOC、ユニバーシアード担当の尾上秀雄さんに伺いました。

まず、ユニバーシアードはFISU(International University SportsFederationのフランス語)という機関のもとで大学スポーツの振興を目指して行われています。FISU自体は1949年に結成されたものですが、その前身としての大会は1923年のパリ大会に遡ります。ユニバーシアードというのは総合大会で11の競技がきまっていて、その他に冬の競技もあり2年おきに奇数年に開催されます。それとは別に偶数年に開催される単独種目の選手権大会があって、2004年には26の種目の選手権大会が4845人の参加者を集めて行われています。オリエンテーリングは、WUOC（World Orienteering University Championships）と呼ばれ、選手権大会1つの種目として行われているものです。

ちなみに開催国と都市は、

2002年　ブルガリア　ヴァルナ
2004年　チェコ　ピルゼン
2006年　スロバキア　コシチェ

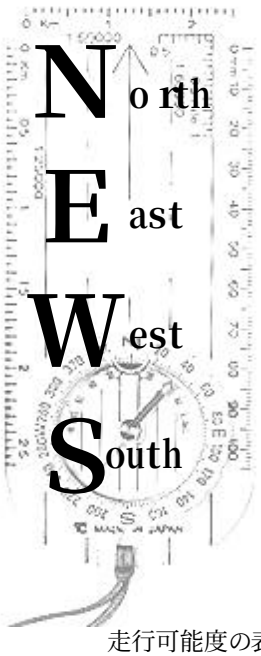
――――――――――――――――――――

2008年8月　エストニア　タルトゥ

総合大会であるユニバーシアードへの参加についてはFISUに入ってなくても可能で、オリンピックへの参加が許されているオリンピック委員会がある国なら参加できます。一方オリエンテーリングなど選手権大会の方はFSI（国際スポーツ連盟）に加盟していることが条件となっていますので、参加申し込みに当たっては、JOC（日本オリンピック委員会）の承認などが必要です。従って事務手続きはJOA経由で行っていますが、選手選考などは、JOAではなく日本学連が予算措置を踏まえて行ってきています。

競技における笛の携行

イギリス連邦の諸国ではオリエンテーリングの笛の携行が義務付けられ、スタート枠に入るときにチェックされる。香港でも同様で、その笛のおかげで、リレー競技中に穴に転落し、大怪我をした皆川さんが助けを求めることができた。わが国では北欧と同様に笛の携行は競技会では求められていないが、パーマネントコースの利用者には推奨している。直ちに義務化しないにしても、だれも通らないところでアクシデントが起こる可能性があるオリエンテーリングでは万が一に備え、各自が自主的に笛を携行したらどうだろう。地図調査や試走は更に発見されにくいので、より必要性が高い。



「O-談注意」

オリエンテーリング競技におけるタイム計測の適正精度は

オリンピックを目指す競技において、時差スタートするものは1/10秒までを公式タイムとすることに何年か前になった。オリエンテーリングに所要時間が近いクロスカントリースキーも採用している。同タイム（同順位）の発生を極力少なくするのが狙いのようである。実際、クロスカントリースキーでは秒以下の勝負である。オリエンテーリングではロング、ミドルはスタートとフィニッシュが離れており、計測装置の設置が大変なことや、走行可能度の表現の限界を考慮されたと思われ、中止になったが、依然としてスプリントは行うことになっている。林の少ない街路における競技なら可能度のばらつきも無いが、林のなかでは、走行可能度が同じ色でも10%以上は異なる。未舗装路ではでこぼこの具合に差があったりする。地図に表現しきれない運・不運で、1秒の差はすぐにでてしまう。それ以外にも現状の電子パンチの挿入性などナビゲーション力や走力以外にタイムを左右することを排除しきれない要素がある。また、オリエンテーリングではまだ選手層が薄いのが原因と思われるが、世界選手権スプリントでも5～10秒の差がついている。従ってオリエンテーリングでは1秒未満は同タイムとし、同順位とするのが適切ではと思われる。（三河屋森平）

（「O－談注意」に対するご意見をマガジンで紹介していきたいので、お寄せください。（送付先は封筒表面参照）